

講 評

評価委員 岡 宏 子

高橋悦二郎氏を班長とする班研究の全報告を、評価委員の一人としてきかせて頂いた。一つ一つの報告に対する疑点の確かめや私からの問題提起案は、夫々の報告ごとにその場で発表させて頂いたが、それをここに繰り返すのは煩雑、又紙数を要するので、最後の全体を取りまとめたの感想めいた私見を中心に、二、三の報告への問題提起の内容も含めながら、述べることにしよう。

母子保健システムについては、私はその専門家でもなく、そのシステムによる事業にたずさわる者でもない。ただ母子保健及びその指導の内容に、生命を護り、健康の保持、促進と共に、心理的行動的側面も大きく加わってきた今日、新生児や乳児の行動発達、或は母性の形成、母子相互交渉等々の研究から、指導内容についての協力の機会も持つことになった。発達心理学の専攻者としての視点と発言であるので、いささか偏りがあるだろうことを、まずお断りしておきたいと思う。

はじめ、プログラム一覧の折に、この心理行動的側面を打ち出したテーマが少なく、母子保健のシステムの検討やその改善には、このような傾向が、研究者の問題意識の中にはまだ充分入ってきていないのかの疑問も感じた。しかし報告を聞き進むにつれ、一見そうみえた身体的な、保健の側面だけでなく、そのなかに、如何に心理面をくみ込んでいくか、又は更に積極的に身体的な側面と心理行動的な面との相互の関連のあり方にまで分析をほり下げる試みが、随所にみられた。ただその際、この種の努力が医師のサイドから行われることが多いため、同じく心身のあり方を問題とはしながらも、調査の際の心理的面の項目のたて方や、分析の際、どのような身体面の項目を、どのような行動面と関連づけて、その関係をみることにするか、という調査項目のたて方自体にも、関係を求めている項目のぬき出し方にも、見通しのたて方にやや適切さを欠くような点もみられ、折角の研究が「こんな点を分析したら、一応こんな結果がみられました」という報告に止まることになっていることが多いように思えた。

二、三の例をあげるなら、たとえば高石氏の「乳幼児の身体発育に影響を及ぼす社会的環境条件」の分析にしても、これだけの大規模な調査をされながら、社会的環境条件が身体発育の何に、どのような影響を与えることになるのかの有機的関連を考えて、指標のとり方や関連の求め方に、一つの結果から母集団をくみかえてその分析をクロスさせる等の方法を工夫されたら、非常に興味ある結果が見出され、これから動いていく母子保健システムのあり方を考える上でもよい示唆になろうもの……と思われた。

また、堀口氏等の母性研究の問題も、チェックポイントに、これまでの心理行動的側面の研究結果がもりこまれていたならば、母親指導の面でも、もっと適切な問題提起がなされるのではないかと感じた。

更にシステムの改善にかかわる、たとえば、手帳の利用活用についての四研究のなかで、ある報告者らは、「一番利用されないのは、歯の欄」と報告し、他の報告者が、「特に歯に関するページの増強をはかる」特色を打ち出すと述べた事に対し、この当事者らで、「何故利用、活用されず、それを他方ではあえて、強くその欄を打出していくのは、何を目標とし、どんなねらいを…」の討議が一切なかったことは、私にとっては意外な思いがし、又このような討議こそ研究者が共通の場で、研究を実際の活動に利するシステムの改善につなげていくモデルを打立てることにつながる筈であろうと思えた。

細かいこと述べれば際限がないのでこの程度に止めるが、全体として、このような研究者の努力が、報告を重ねるうちに、その分析の際にとり出すポイントが、前段階の研究結果から予想される関係のあり方の問題点を適切におさえること、そして、ただとらえやすい単純な要因をとり出すことから、より複合的な関連を分析するものへと変化させていくことへの研究が展開していくこと、そのような関連の分析が、実際のシステム改善への適切な示唆となろうことを期待し、私ども心理学関係者の協力も、まだまだ不十分であることを、この問題を勉強させて頂きながら痛感した次第である。